

小児整形外科の最新知見

日本整形外科学会の会員数が 25,000 名に達すると聞いています。急激に進む少子高齢化の波の中、多くの会員の目はおのずと高齢者に注がれます。一方、日本小児整形外科学会の会員数は現在 1,115 名で、わずかですが減少傾向にあります。若い整形外科医に「なぜ小児整形外科を志さないのか」と尋ねると、返ってくる答えは「母親を含めコミュニケーションをとるのが大変」「治療適応を決めるのが難しい」「治療の結果がすぐに出ない」「進歩が少ない」等です。

整形外科の起源 Orthopaedie はギリシャ語の orthos（正す、変形矯正）と paidion（小児）の合成語です。そこには子どもが成長とともに矯正されるのを促す学問という意味があると思っています。すなわち整形外科は、本来は個々のパーツの矯正ではなく、身体全体の矯正が大切な目的であったはずで、確かに小児整形外科はさまざまな点で苦勞が多く、短期間では結果が出ません。しかしこの Orthopaedie の精神を学ぶことができる数少ない領域ではないかと考えています。

今回の特集ですが、基礎研究の発展とともに難病のモルキオ症候群 A 型、低ホスファターゼ症（HPP）、軟骨無形成症の薬物療法が可能となりつつあります。これら稀少疾患に対する薬物治療の開発は骨の成長・代謝のメカニズムの大切さを教えてくれます。新たな手術器具の開発は、低侵襲での成長抑制を可能とし、変形矯正や脚長不等治療が容易に可能となってきています。一方、予防により激減したかにみえた発育性股関節形成不全（DDH）は、関心の低下のためか、診断遅延例が多くなっています。子どもは社会を映す鏡であり、悲しいことですが、小児虐待は、必ず整形外科医の頭に入れておく必要がある時代となっています。侵襲のない超音波診断の適応はどんどん広がり、小児骨関節感染症の治療も時代とともに変化しています。また保険点数の追い風として、新たに小児運動器疾患指導管理料の算定が可能となりました。

今回、それら最新知見を担当された先生方はその知見を大変わかりやすく、詳細に執筆していただきました。小児整形外科医は、子どもの全体像を見ながら、長い期間をかけて治療し、社会に貢献できる心と身体を持つ成人に成長させることを常に心がけています。苦しみも多いですが、問題を持った子どもが、うまく成長できた時の喜びはかけがえのないものです。本特集にて、若い先生方が小児整形外科に少しでも興味を持っていたいただければ、企画の立案者として幸甚この上ないことと思います。

（服部 義）